

**FUKUSHIMA
市民
インタビュー**

町内会のふれあいを大切に、有事に備える
遠原団地町内会長・自主防災会長

梅津正吾 さんに聞きました！



梅津 正吾

活動内容は？

遠原団地町内会は現在170世帯、460人が生活しています。町内のコミュニティを築き、有事の際に互いに協力して避難などができるように日頃から活動しています。

毎朝のラジオ体操や週1回のももりん体操、年3回の町内一斉清掃などを通して、日頃から顔を合わせることで人のつながりができ、一人暮らしの高齢者への声掛けやごみ出しの手伝いなども町内会の活動として行っています。

秋には芋煮会を開催し、子どもたちも多く参加します。

秋には芋煮会を開催し、子どもたちも多く参加します。その中で、要支援者の対応や災害時の避難の方法などを共有し災害に備える必要性が増し、防災活動に着手しました。情報を共有するため、家族構成や支援の要否などをアンケートし、世帯の状況の把握に努めていることは、防災組織の基盤として有意義

それぞれのイベントで、防災講話を聴いたり、避難訓練をしたりするほか、消防署西出張所の協力のもと、ポンプ車を派遣してもらい消火訓練も行っています。また、火災報知機の自主的な点検なども呼びかけ、町内会内の設置率は93%を超えています。

自主防災会発足のきっかけは？

10年ほど前から組織はありましたが、本格的に活動を始めたのは震災以降、皆さんの自助共助の意識が強くなってきてからです。町内会の motto「安全安心明るい町づくり」を実現するために、土台として住民同士が触れ合える環境づくりを心掛けてきました。



▲真剣な眼差しで訓練を行う参加者

苦勞されていることは？

なものでと思います。とにかくイベントごとに人を集めることです。昔ほど町内のつながりが無くなった現在、特に若い人たちは町内会のイベント、まして防災訓練には積極的に参加してくれません。

今後の展望は？

防災に限らず、町内の住民同士の触れ合いやコミュニティの維持を若い人たちに引き継いでいきたいです。年々子ども数も減少しており、世代を超えた交流も希薄になっていきます。今後も定例のイベントや日々の体操などを通じて住民同士の信頼感をつくり、その上で、有事の際には地域一丸となって対応できるように備えていきたいですね。



**We Love ♡ ふくしま！
第15回『新時代に福島らしさを！』**

「いらか 嵐の波と雲の波〜」「柱のきずはおととしの〜」

風薫る五月、こいのぼりがなびく姿を見ると、お馴染みの童謡が頭の中に流れてきます。こいのぼりやちまき、柏餅など今も馴染んでいるものがある一方で、「羽織の紐の文」のように現代では実感として湧きにくいものがあるのは、少し寂しい気がします。

変化の速い現代、次々と新しいものが登場しては古いものに取って代わり、情報化・国際化が進むことで世界や日本全体で通じる「標準」が重視される、それはやむを得ないことでしょう。

でも、そうなればなるほど、日本ならではの、福島ならではの根幹的なもの、他とは異なる個性は大切にしたいものです。

実際、外国生活をした人ほど日本らしさが求められ「日本」を意識すると聞きます。国内でも「固いモモがうまい」と知っ

ているのは福島に関係する人ぐらい。わかる人には親近感が湧くし、知らずに驚く人に対しては妙に誇らしくなります。

歴史上初めて日本の古典、万葉集に由来する元号となった「令和」。そこには、変革が必要とされる中であっても、日本らしい伝統を大切に、調和を図って行こうという願いが込められているものと推察されます。

「令和」の新時代には、ますます多くの外国人や国内の人が、観光や仕事で福島を訪れることになるでしょう。その人たちにもかけがえのない独自の文化があり、その多様性、お互いに認め尊重し合わなければなりません。

そうした共通基盤に立って、私たちは誇りをもって、日本の文化、福島の文化をこれまで以上に守り育てるとともに、福島らしい新しいものを作って行きたいものです。

改めて日本全体を、世界も眺めて福島らしさを追求する。その先に新時代の新しいステージが開けてきそうな気がします。

福島市長 こはた ひろし 木幡 浩